様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月　 ４ 日現在

機関番号：３４５０４
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２０３４７

研究課題名（和文）労働組合の発展とイギリス初期モダニズム小説の語りの形成

研究課題名（英文）The Development of Unionism and the Formation of Early-Modernist Narrative in British Fiction

研究代表者
伊藤　正範（ITO, Masanori）

関西学院大学・商学部・教授

研究者番号：１０３２２９７６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　1,400,000円、（間接経費）　420,000円

研究成果の概要（和文）：初期モダニズム期のイギリス小説、主にジョーゼフ・コンラッドとH. G. ウェルズによる作品を中心に、19世紀末におけるイギリス労働組合運動の発展が小説の語りに及ぼした影響を検証した。最終的に、労働組合運動の活発化に伴うポピュラー・メディア上での労働者の「声」の顕在化と、同時期における小説の語りの形成との関連を明らかにし、初期モダニズム文学の特徴的な芸術様式が、階級社会における音声の多重化現象へのある種の対応として発生したものであることを立証した。また、組合運動を通して、集団としての労働者の社会的影響力が増大していくに従って、物語において群衆が果たす役割が拡大していくことも見出した。

研究成果の概要（英文）：This project, dealing mainly with fictional works by Joseph Conrad and H. G. Wells, investigated how the development of late nineteenth-century trade unionism and labour movements influenced the formation of early-modernist narrative. By focusing on the relationship between the rise in laboure rs' "voices," observed in the popular media, and the specific features of contemporary fictional narrative, this research demonstrated how the unique aestheticism of early-modernist literature arises in response to the multiplication of speeches within the class society after a series of successful labour campaigns. Furthermore, it was discovered that the fictional role of crowds expands as the social influence of labourers as a mass increases in the age of unionism.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学、英米・英語圏文学

キーワード：イギリス文学　労働運動　初期モダニズム　群衆

１．研究開始当初の背景

初期モダニズムとして一般的に分類されるジョーゼフ・コンラッドの語りについては、ヴィクトリア朝的形式からの明らかな不連続性と、1920 年代において全盛期を迎えるモダニズムの萌芽的形式を指摘する見解が伝統的に定着してきた。具体的な特徴としては、『ナーシサス号の黒人』（*The Nigger of the "Narcissus,"* 1897）における視点の変動や、『密偵』（*The Secret Agent*, 1907）における登場人物への共感の度合いの揺らぎ、さらには『青春』（*Youth*, 1902）や『闇の奥』（*Heart of Darkness*, 1902）などで採用される信頼の置けない語り手、マーロウなどを挙げることができる。

しかし近年、こうした初期モダニズム観にいくつかの修正が施されつつある。例えば、Peter Brooker は、初期モダニズムがハイ・モダニズムへと直線的に「上昇する」動きであることを否定し、むしろ 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけての複雑な社会的形態への、個々の作家によるダイナミックな反応として捉えるべきであると主張する。また、従来ヴィクトリア朝的リアリストとしてみなされてきた H. G. ウェルズを初期モダニストに加える試み（Lynne Hapgood）や、モダニズム文学と大衆文学との間の明確な線引きを否定しようとする試み（Nicholas Daly）もなされている。さらには、モダニズム文学そのものが、商業的側面において当時の新聞・雑誌などのポピュラーメディアと親密な関係を築いていたことを主張する動き（Patrick Collier）もある。

モダニズム文学全体における問い直しがこのように活発化する中、研究代表者もまた過去の研究（平成 19～21 年度科学研究費補助金若手研究（B）「19 世紀末ジャーナリズムにおけるテロリズム表象と初期モダニズム小説における影響」）において、コンラッドの『ナーシサス号の黒人』や『密偵』、ウェルズの『透明人間』（*The Invisible Man*, 1897）などにおけるテロリスト表象に着目し、初期モダニズム小説が、ヴィクトリア朝的なジャーナリズムとしての特質と決別しているわけではなく、むしろジャーナリズム的言語を積極的に取り込むことで、新時代の「語り」の構築を試みていることを見出してきた。こうした研究成果は、モダニズム小説の形式が決して排他的な芸術至上主義から生み出されたものではなく、むしろ当時のポピュラーカルチャーとの細密なネゴシエーションを経て生じたものであることを明確に示唆している。

本研究の主題である、初期モダニズム小説と 19 世紀末労働運動との関連を探るという着想は、前述の研究活動において当時のジャーナリズムにおけるアナーキスト表象に取り組む中、発展的に得られたものである。

２．研究の目的

本研究では、伝統的に管理階級によって運営・講読されてきた新聞・雑誌などのメディアに、労働者階級の「声」が侵入してきた実際の事例を調査収集するとともに、そうした変遷が初期モダニズム小説の語りとどのような関わりを持っているのかを、個々のテクストにおける労働者表象の分析を通して検証することを目的とした。その際、Raymond Williams, *The Long Revolution* において指摘されるような、1870 年の初等教育法制定以降の労働者階級における教育の浸透と、当時のジャーナリズムの急成長との関連を視野に入れた。

研究開始前の予備調査では、19 世紀末の新聞・雑誌における労働者の表象が、時代を追うごとに特徴的な変化を来している事例がいくつか見出された。例えば、1876 年の商業船舶ロックスリーホール号における船員の反乱事件に際して、当時の *Nautical Magazine* が、放縦であるがゆえに適切に管理されなければならないという船員像を提示しているのに対して（"On the Authority of the Master of a British Ship to Correct the Mariners," *Nautical Magazine* 45 (1876): 481-93)、1893 年のウォッチマン号事件に関する *Reynolds's Newspaper* の記事は、いわば管理者側の暴虐の犠牲者として長く苦しめられてきた船員像を、労働者の観点から共感的に提示している（"The Sailor's Hard Life," *Reynolds's Newspaper*, 6 Aug. 1893: 2)。

こうした調査結果を受け、本研究では、下記４点を主要な目的として設定した。

(1) 上記のような労働者表象の変遷が 19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけてのポピュラー・メディアにおいて広く観察される現象であることを、当時の新聞・雑誌などの精査を通して確認する。

(2) そうした現象と初期モダニズム期の小説におけるさまざまな形式的特徴、特に登場人物に対する視点の変動（例：『ナーシサス号の黒人』の語りにおいて、船員たちを指す代名詞が共感的な "we" と アイロニカルな "they" の間で変動すること）との関連を検証する。

(3) その上で、小説テクストの語りが、階級的な「声」の複層性を抱える現実社会とどのようなネゴシエーションを行っているかを解明する。

(4) 最終的に、初期モダニズム文学についての新たな理論構築を行う。

３．研究の方法

(1)　本研究の遂行においては、19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけてのポピュラーメディアにおける労働者表象の変遷に着目し、実際の社会において労働運動の「声」がどの程度の大きさを獲得するに至ったのかを検証

することが重要な過程となる。そのため、主に研究初年度から二年目にかけて（必要に応じて三年目においても）当時の新聞や雑誌などの一次資料の収集・分析を中心とした研究活動に注力した。

具体的には、労働者の不服従問題、ストライキなどの労働紛争、さらにはその裁判に関する記事に着目し、ポピュラーメディアにおける労働者の表象が、時代を追うごとにどのような変化を辿るのかを検証した。その際、労働者表象に紛れ込んでいる退化論言説や社会ダーウィニズム言説に注目しながら、労働者の身体や精神性にまつわる描写を子細に分析した。19 世紀末のイタリアの犯罪人類学者であるチェーザレ・ロンブローゾの観相学理論の影響にも注目した。

分析作業においては、メディアごとの政治的ポジションの相違にも十分な注意を向けた。例えば、前項で挙げた *Reynolds's Newspaper* などの低価格の日曜紙においては読者層の大半が労働者階級で構成されていたのに対して、*Nautical Magazine* などの海運関連の雑誌は主に船舶のオーナーや商船の船長によって講読されていた。個々のメディアがどのような読者層を抱えていたかに目を配りつつ、さらに当時のポピュラーメディア全体における階級的構成の遷移を視野に入れることで、より包括的な議論を目指した。

こうした資料調査において主に対象とした時代は 1870 年以降である。これは労働者階級への教育が浸透するきっかけとなった初等教育法が制定された年に当たる。また 1889 年におけるロンドンの港湾労働者による大規模ストライキを経て、労働組合の活動が急激に活発化したことから、当該時期の労働者表象には格段の注意を払った。また比較のため、1850 年以前の新聞・雑誌についても必要に応じて調査対象に含めていった。同時に、当時の労働運動と公教育に関する二次文献に広く当たることによって、当時の労働運動の進展状況と、その背景にあると見られる労働者階級への教育の浸透についての一般的な知見を得た。

資料調査に際しては、研究代表者の海外研修期間（平成 23 年 10 月～平成 24 年 9 月）を活用し、イギリス・ケンブリッジ大学の附属図書館において主にマイクロフィルム資料の収集活動を中心に進めた。1800 年から 1900 年までの新聞については British Library によって一定程度のデータベース化（British Newspapers 1800-1900）が進んでいたため、収集作業において積極的に活用した。

(2) 個々の小説テクストにおける労働者表象の分析については、本来、研究年度二年目からの本格的着手を予定していたが、初年度中途においてすでに理論形成に必要な一定程度の調査成果を得ることができたため、予定を前倒しして着手した。

対象テクストとしては、コンラッドの小説作品を中心に据えながらも、より包括的な初期モダニズム理論の構築のため、同様に労働者の描写が多く登場するウェルズの小説も含めた。具体的には、コンラッドの『ナーシサス号の黒人』、『密偵』、ウェルズの『透明人間』、『タイムマシン』（*The Time Machine*, 1895）を主な研究対象とした。また比較対照のため、ヴィクトリア朝前期の小説であるチャールズ・ディケンズ『バーナビー・ラッジ』（*Barnaby Rudge*, 1841）、エリザベス・ギャスケル『北と南』（*North and South*, 1855）や、チェコ文学であるカレル・チャペック『R.U.R』（1921）も取り上げた。

テクストの分析に当たっては、労働者表象に混じり込んでいる退化論や社会ダーウィニズムの影響に注目しながら、労働者に対する語りの距離（アイロニーや共感の度合い）を精密に測っていった。

ただし本研究では、文学テクストとポピュラーメディアとを完全に均質なものとみなすのではなく、むしろ小説が独自の語りをもって社会的現実と対話し、それによって社会における自らのポジショニングを模索しようとしている点に注目した。ゆえに、書簡やエッセイなどにおいて表明される作家の政治的姿勢にも十分な注意を払った。

最終年度に至るまで、こうした個々の小説テクストやその他の著作の分析作業を通して、初期モダニズム小説の形式的側面に関する理論形成を進め、論文発表によって研究成果の開示を行った。

４．研究成果

(1) 研究初年度の資料収集活動により、当時のイギリス商船における労使問題に関して一定程度の知見を得ることができたため、『ナーシサス号の黒人』を題材として、当時の労働運動の変遷と初期モダニズム小説の語りとの関連について理論化を試みた。

従来、本テクストにおいては、船員ドンキンによって煽動される暴動未遂が語り手によって否定的に描写されることを理由に、反社会主義的姿勢が読み込まれることが多かった。書簡や随筆において散見されるコンラッド自身の反社会主義思想を鑑みれば、そうした見方には一定の正当性があると言える。

だがこの小説においてそうした政治性を媒介する物語要素は、複数のエピソードにおける反復を通して、次第に現実世界における労働運動の複雑な問題性をテクスト内に取り込んでいく。

例えば、反乱を煽るドンキンが投げる船具、ビレーピンは、翌朝、船員たちを前に並べ叱責する船長のポケットの中から再登場し、ドンキンの船員としての逸脱を象徴する小道具として機能する。にもかかわらず、先行する場面において、ビレーピンはすでに、船員たちに過酷な労働を強いる船長によって「武

器」として、他ならぬ逸脱した用いられ方をしているのである。ここには、当時のイギリス商船で現実に発生していた、船長による数々の暴行事件が重なり合ってくる。

また、仕事嫌いのドンキンがテクストの各所で吐き出す権利主張の「声」は、反復を経て、次第に当時の労使裁判において発せられた現実の労働者の「声」へとリンクしていく。

コンラッド自身の意図が、当時の労働運動を揶揄するものであったとしても、その精緻な筆づかいが拾い上げる現実のディテールは、作者の政治的意図とは裏腹に、「ナーシサス号」という一見シンプルな船上世界を、複雑な現実の小宇宙へと作り変えていくのである。

上記のような議論を経て、最終的に、テクストのリアリズムが自らの政治性と齟齬をきたす歪みを呼び込み、結果として一元的政治性の実現を妨げていることを立証した。研究成果は、論文「『ナーシサス号の黒人』の政治性と 19 世紀末イギリス労働運動」として発表した。

(2) 同様に研究初年度において、上記の研究成果に部分的に依拠しながら、『タイムマシン』(1895)、『ナーシサス号の黒人』(1897)、『密偵』(1907) の三者間における比較研究を行った。主要な目的は、労働運動の進展に伴う労働者自身の発言力の変化が、テクストの語りの形成にどのような影響を及ぼしているかについて検証することである。その際、カレル・チャペック『R.U.R.』(1920) において、ロボットたちの「不完全な身体」が労働者のメタファーとして機能している点に注目し、類似した身体性を内包する労働者表象をイギリス小説に探していった。

結果として見出されたのが、『タイムマシン』に登場する労働者の末裔、モーロックや、『ナーシサス号の黒人』に登場するドンキンの退化した身体、また『密偵』における鉤爪の御者の欠落した身体である。これらの「不完全な身体」を抱える労働者たちが、著作年代の新しい作品に至るほど、より顕在的に自らの「声」を獲得していくことが明らかになった。これにより、『R.U.R.』が「不完全な身体」と「完全な声」のパラドックスを通して達成しているモダニティが、先行する三つの小説においても漸次的に実現されていることが見出された。

労働者とロボットという従来にない着眼点から、モダニズムの勃興と労働運動の結びつきを立証し、ユニークな初期モダニズム形成論を実現するに至った。成果は、論文「カニバルの囁き、反逆者の雄弁、シレノスの語り、そしてロボットの〈声〉——労働運動と初期モダニズム小説」として査読誌に発表した。

(3) 研究年度二年目においては、『ナーシサス号の黒人』についてのこれまでの研究を発展させる形で、テクストの美学的側面における労働運動の影響へと関心を拡大していった。

その際に注目したのが、船員ドンキンの描写におけるアイロニーの変動である。従来の研究において、このテクストは「パリンプセスト」的な語りの構造を有していると論じられてきた。語りの二重構造において、ナーシサス号のロマンティックな冒険譚が、実際は現実の商業主義の支配下で進行しているというのである。そうした見方において、労働者の「権利」を声高に主張する怠け者船員ドンキンのアイロニカルな描写は、一見、作者コンラッドの伝記的な反労働運動主義を忠実に反映したものとして映る。

しかしながら、彼の「雄弁さ」は、それに否応なく耳を奪われる船員たちの姿を通して、アイロニーの支配から逸脱する説得力を伴い、当時の労働運動家の声を「雑音」として語りに残留させていく。

また、病に伏した黒人船員ウェイトに向かってビスケットを投げつけ、その金を奪うというドンキンの二つ目の「テロリズム」は、先行する一つ目の「テロリズム」、すなわち船長に対するビレーピン投擲を通して彼が味わった敗北感とは真逆の「勝利」の感覚を彼にもたらす。ロンドン上陸を迎える終末部にかけて、テクストに残留するその勝利感は、商業主義の歯車として使役され続ける他の船員たちの理不尽な社会的境遇と対比をなしながら、小説の語りそのものに亀裂を生じさせていくのである。

そうした「テロリズム」的語りは、最終的に資本主義経済と船員たちとの関係を表す「白」と「黒」のシンボリズムを解体しながら、テクストの政治性に多元性をもたらす。

このように、コンラッド小説の形式的側面の形成において、当時の労働運動の発展が大きな関わりを有していたことを見出した研究は過去に類例がなく、初期モダニズムの語りの再定義において意義深い研究成果が得られたと考えている。成果は論文 “A Belaying Pin and a Biscuit: Labour Movements and Narrative in *The Nigger of the Narcissus*” として査読誌に発表した。

(4) 最終年度においては、19 世紀末イギリスの労働組合運動と初期モダニズム小説の発展との関わりについてより包括的な視点から探るため、主要な研究対象をコンラッドから H・G・ウェルズへと移行し、比較対照のためにチャールズ・ディケンズやエリザベス・ギャスケルによる小説テクストの分析も並行して行った。注目したのは、1889 年のロンドン港湾労働者による大規模ストライキを経て、労働者の社会における集合的位置づけがどのように変化したのかという点である。一次資料の分析によって明らかになったのは、①リベラル派、保守派を問わず、さまざまなニュースメディアがストライキについて概して肯定的な報道を行っていたこ

と、②そうした出版物を通して、ストライキに参加する労働者たちが前例のないパブリシティーと共感を獲得していたことなどである。そうした変化が実際の文学テクストにどのように反映されているかを検証するため、ウェルズの『透明人間』に登場する群衆に着目した。物語終盤において、人夫や鉄道夫をはじめとする労働者たちの群衆は、透明人間グリフィンを打ち倒すことによって社会をその脅威から救い出す。グスタフ・ル・ボン（1841-1931）などの群衆理論家によって、群衆の持つ激情や犯罪性が「退化」と結びつけられる中、『透明人間』という小説テクストが、あえて群衆に社会秩序の保全を委ねた点には、港湾ストライキを経て当時の群衆観が変化しつつあった様子を透かし見ることができる。また、主要登場人物たちを差し置いて突如として物語の前面に出てくるこの群衆には、伝統的な〈個〉に代わって〈集団〉が物語の最終的解決を引き受けるという、従来の小説にはない特有のダイナミクスを見出すこともできる。群衆という要素に注目することにより、労働組合運動と初期モダニズム小説の関わりについての新しい知見を導き出したのが、当年度の最大の成果である。上記成果は論文「*The Invisible Man* におけるモダン時代の群衆」として、査読誌に掲載予定である（2014 年 1 月投稿、3 月「修正要件なし」での掲載受理、7 月発行予定)。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計４件）

① 伊藤正範、「*The Invisible Man* におけるモダン時代の群衆」、『試論』、査読あり、49 巻、2014 年（予定）
② Masanori Ito, “A Belaying Pin and a Biscuit: Labour Movements and Narrative in *The Nigger of the Narcissus*,” *Studies in English Literature* (English Number), 査読あり, vol. 54, 2013, pp. 11-28
③ 伊藤正範、「カニバルの囁き、反逆者の雄弁、シレノスの語り、そしてロボットの〈声〉――労働運動と初期モダニズム小説」、『コンラッド研究』、査読あり、2012 年、3 巻、pp. 1-24
④ 伊藤正範、「『ナーシサス号の黒人』の政治性と 19 世紀末イギリス労働運動」、『言語と文化』、査読なし、15 巻、2012 年、pp. 61-74

〔その他〕
ホームページ等
① 関西学院大学研究業績データベース
http://www.kwansei.info/html/28382.html
② 日本コンラッド協会国内研究文献目録
http://conrad-soc-japan.org/bunken.html

６．研究組織
(1) 研究代表者
伊藤 正範（ITO, Masanori）
関西学院大学・商学部・教授
研究者番号:10322976

(2) 研究分担者
なし

(3) 連携研究者
なし